



メモリアルスタンド玄関で天皇、皇后両陛下をお迎えした
(手前右から) 武豊騎手、柴田善臣騎手、松永幹夫騎手

ヘヴンリーロマンスを管理する
山本正司調教師は内心思っていた。
「ウチは節目のレースには不思議と強い」

札幌記念がもたらした 天皇賞参戦というチャンス

山本正司はヘヴンリーロマンスがGIIの札幌記念を勝ったとき、秋の目標がはっきり見えた気がした。目標というのは11月13日の牝馬限定G1、エリザベス女王杯である。牝馬との混合GIIを勝ったままなら、牝馬限定のG1で大いに勝機があると考えたのだ。

ただし、8月21日の札幌記念からエリザベス女王杯までは3カ月近い間隔があ

る。万全の状態では臨むには、その前に一度レースを使っておきたい。天皇賞・秋はどうか。エリザベス女王杯までは中1週とやや間隔が詰まるが、2000年は札幌記念を勝っているように、得意な距離である。天皇賞のきびしい流れを経験しておくことは、あとのエリザベス女王杯にもきつとよい影響を及ぼすはずだ。小柄で一度使うとダメージの残るようないかにも牝馬らしい牝馬ならこのローテーションはためらわれたが、幸い、ヘヴンリーロマンスは500kgを超える大型馬で、少々ハードトレーニングではへこたれない強さを持っている。札幌記念を勝ったあとも、コンディションはよく、充実期に入っているのがわかった。

「まずは天皇賞だ」

ステップと考えた天皇賞だが、まったく勝算がないわけではなかった。コンディションのよさもそのひとつだが、5歳の夏になってから、競馬に行つての反応がよくなくなってきた気がするのだ。すばらしい切れ味を持つてはいても、それを繰り出すまでもうひとつ時間がかかっていた馬が、鞍上の松永幹夫の指示にすばやく応じることができるようになっている。混戦の札幌記念を勝ち切ったのも、その新境地のなせる業だった。

「それに、ウチは節目のレースには不思議と強い」

山本厩舎は過去に2頭の中央G1ホー

スを出している。そのうちのハッピープログレスの勝利(安田記念)はグレード制が導入され、短距離路線が整備された最初の年、1984年のことだった。もう1頭のレギュラーメンバーは交流G1のJBCクラシックを勝ったが、これも創設された年のことだった。なにかある年には強いのだ。

05年の天皇賞・秋は中央競馬史上はじめて天皇、皇后両陛下がご覧になる。戦後初の天皇競馬という「節目」である。これはウチには好材料だ。口には出さなかったが、内心ではそんなことを考えていた。

節目の天皇賞でヘヴンリーロマンスに乗る松永幹夫は、師の山本ほど楽観的にレースを迎えることはできなかった。いや、馬の状態に関しては特別な不安はなかった。それなりの期待も持っていた。しかし、それ以上に、気にならなければならぬことがあったのだ。

天皇賞の当日、松永は関西騎手会長として、関東騎手会長の柴田善臣、三冠騎手の武豊とともに、天皇、皇后両陛下をお迎えして、挨拶をしなければならなかったのだ。

「間近でお目にかかるなんて、もちろんはじめての経験ですからね。もう、緊張しちゃって、レースのほうにはあまり頭が行っていませんでした」

メモリアルスタンドの玄関で、勝負服を着て、両陛下をお迎えする。勝負服は、ヘヴンリーロマンスのものだった。

緊張気味の松永たちに、両陛下は気さくにお声をかけられた。前の週の武豊とデイーブインパクトの三冠達成も存知だったようで、その知見の深さは出迎えたものを驚かせた。

「そんなに長い時間ではありませんでしたが、なにごとにも終わってほっとしました。今日の仕事は終わった。そんな感じでした」

もちろん、実際の仕事は、出迎えたあとである。松永も師の山本同様、それなりの期待は持っていた。夏の札幌の2戦2着になったクイーンステークスと勝った札幌記念で、馬の変身ぶりをと感じ取っていたからだ。だからといって、当日の単勝14番人気という評価に反発を感じたわけではない。G1ホースが史上最多の8頭も出走する中で、大穴決着の札幌記念勝利は、それほど胸を張れる成績ではないこともわかっていったのだ。

「また1枠だな。よく1枠に入る馬だ」

そんなことを考えながら馬場に向かった。

馬場入りすると、前日にいわれていたことを思い出した。

「勝った場合は、ウイニングランをしたあと、ロイヤルボックスに向かって一礼すること」

そういう指示が出ていた。しかし、激しいレースを走りきったあと、すぐに息が入って、騎手が一礼している間おとなしく待っている馬なんているのだろうか。軽い会釈ならともかく、ヘルメットを取るのさえむずかしいのではないのか。

「誰が勝つにしても、そんなこと、とてもできない。無理だろうな」

他人事のようにそう考えた。

両陛下を迎えた騎手の馬が馬券にからむのではないか……

清水武は4コーナーから見る競馬が好きだ。4コーナーの出口、3コーナーか



[特別読切]

馬競覧天

一枚の写真



2005年10月30日、天皇皇后両陛下が東京競馬場へ行幸啓され、エンペラースカップ100年記念第132回天皇賞(秋)をご覧になった。この記念すべきレースを制したのは、牝馬のヘヴンリーロマンスと松永幹夫騎手のコンビ。レース後、松永騎手は馬場を一周すると、メモリアルスタンド前で馬を止め、ヘルメットを取り馬上から両陛下に深々と一礼をした。14番人気の馬が勝利するという波乱の結果だったため競馬場内は騒然としていたが、これによってスタンドに静寂が訪れたのである。——2005年の競馬の中で最も印象的なシーンのひとつであったこの場面を、関係者のインタビューを織り交ぜながら、振り返ってみよう。



阿部珠樹=文
text by Tamaki Abe
JRA=写真
photograph by JRA





内のダンスインザムード、外のゼンノプロロイの間を豪快に割って出たヘヴンリーロマンス

さらに馬を進めても、落ち着きぶりは変わらない。 「これならヘルメットを取って一礼できるかもしれない」

ポジションを決めながら、清水は考えた。ヘヴンリーロマンスが止まった。最初はメモリアルスタンドを入れた馬の写真にしようと考えていたが、清水の位置からだとも照明の柱が邪魔になった。それで、思い切って向きを変え、スタンドを入れるのを止めて、1コーナー過ぎの木

を背景にした馬の姿を撮ることにした。これだと、大観衆の様子はわからないが、馬の姿はきれいに浮き上がって見える。「馬とカメラの距離は約50m。これ以上離れると新聞ではわかりにくくなるし、近づきすぎると競馬場の感じがなくなる。それで、その距離にしたんです。レンズは400ミリの望遠、シャッタースピードは500分の1、レース中はだいたい640分の1から800分の1です。遅いといえは遅いけど、馬はじつとしていませ

完全におとなしくしているのは無理だろう。一瞬でも止まって、軽く会釈できれば十分なのではないか。だが、ゴールを過ぎて、向正面、3コーナーと馬を進めるにつれて、だんだん気持ちが変化してきた。「馬がすくなく落ちていたんです。これなら、きちんと一礼できるかもしれない。そう思いました」

優れたスポーツ写真は、たいてい、画面から「音」が聞こえてくるものである。ぶつかり合いの音、選手たちの激しい息づかい、痛恨のうなり声、勝利の雄叫び。そうした音が、画面から聞こえる感じがするのが優れたスポーツ写真の特徴だ。そういう点から考えると、清水武が撮ったこの写真は、一般的なスポーツ写真の対極にあるものに思える。この写真から聞こえてくるのは、競馬場ではほとんど出会うことのない静謐、時間が静止したような沈黙である。だが、深い沈黙という「音」が聞こえてくる点で、この写真もまた、優れたスポーツ写真の中に含まれるともいえる。

予期していた勝利とはいえなかったが、それでも、松永幹夫は、レース後のセレモニーの手順を忘れることはなかった。ベテランである。ゆつくりウイニングランをさせながら、メモリアルスタンドに向かう。レースのあとだから、たとえロイヤルボックスの下に行っても、

「でも、普段から嘯み付いたり、ほかの馬をけつたりするような、やんちゃな馬ですからね。勝ったあと、おとなしくしているなんて考えられませんでしたよ」それが、なぜか、この日はおとなしく松永の指示に従っている。いや、それどころか、自ら進んで表敬の行動を示しているようにさえ見えた。14番人気の馬が1番人気の馬を破るといふ波乱の決着である。当然、ゴール過ぎのどよめきは大きかった。そして、勝ち馬に対するコール、負けた馬に対する罵声などもわずかに混じった歓声もいくつかあった。

競馬の撮影も長く経験している清水だが、レース終了直後の馬が、この日のヘヴンリーロマンスのようにおとなしく鞍上の一礼を待っているなどありえないことのように思われた。だが、そうしたありえないことが起こったのも、天皇賞の天皇賞というこの日の性格をよくあらわしているように思われ、翌日の紙面で大きく掲載することにした。同じようなアングルから撮られたものなど、反対の方向から撮られたものなど、

清水はベテランなので、松永たちの出迎える場面に立ち会って、両陛下との様子を撮影した。「両陛下はほんとうにお話好きで、武豊くんはNHKの朝のドラマに出演したときの話を聞かれたりしていました。ジョッキーたちも、あとで出たコメントほど緊張はしていない感じでしたよ」天覧といっても、清水たちにも特別な注意は出ていなかった。服装もネクタイ着用などというのではなく、普段の服でいい。思ったほど格式ばったものでもないように思われた。

だが、騎乗している松永幹夫はそう心配してはいなかった。ベースの上がるところで一息入れれば、道中、無理をさせていない分、最後の坂上で必ずいい脚を使ってくれる。松永の読みは正しかった。坂を上がると、まず、内からダンスインザムードが抜け出した。それに馬場の真ん中や外目を通ったゼンノプロロイが襲いかかる。

この日、清水は、4コーナーで出走馬全体の様子を撮影したあと、ゼンノプロロイとタップダンスシチーをねらったショットを付け加えていた。しかし、勝ったのは牝馬のヘヴンリーロマンスだった。「やっぱり、出迎える騎手が勝ったか」レース前に浮かんできた予感を思い出しながら、その勝ち馬が戻ってくるのを待った。

ヘヴンリーロマンスと松永は、ゴールを過ぎた後、向きを変えるのではなく、そのままコースを1周し、左回りでメモリアルスタンドのほうに向かった。ちょうど、カメラを構える清水の後ろから来て前になる格好である。レースを終えたばかりの馬は、気持ちにも体にもレースの興奮が残っていることが多い。体には血管が太く浮き出ていて、呼吸は荒く、クビを上下左右にしたり、騎手の指示に反抗しようとしていたり。「どの辺に止まって挨拶するのだろう。いったいおとなしくしているものなんだろうか」

清水はベテランなので、松永たちの出迎える場面に立ち会って、両陛下との様子を撮影した。「両陛下はほんとうにお話好きで、武豊くんはNHKの朝のドラマに出演したときの話を聞かれたりしていました。ジョッキーたちも、あとで出たコメントほど緊張はしていない感じでしたよ」天覧といっても、清水たちにも特別な注意は出ていなかった。服装もネクタイ着用などというのではなく、普段の服でいい。思ったほど格式ばったものでもないように思われた。

だが、騎乗している松永幹夫はそう心配してはいなかった。ベースの上がるところで一息入れれば、道中、無理をさせていない分、最後の坂上で必ずいい脚を使ってくれる。松永の読みは正しかった。坂を上がると、まず、内からダンスインザムードが抜け出した。それに馬場の真ん中や外目を通ったゼンノプロロイが襲いかかる。

この日、清水は、4コーナーで出走馬全体の様子を撮影したあと、ゼンノプロロイとタップダンスシチーをねらったショットを付け加えていた。しかし、勝ったのは牝馬のヘヴンリーロマンスだった。「やっぱり、出迎える騎手が勝ったか」レース前に浮かんできた予感を思い出しながら、その勝ち馬が戻ってくるのを待った。

ヘヴンリーロマンスと松永は、ゴールを過ぎた後、向きを変えるのではなく、そのままコースを1周し、左回りでメモリアルスタンドのほうに向かった。ちょうど、カメラを構える清水の後ろから来て前になる格好である。レースを終えたばかりの馬は、気持ちにも体にもレースの興奮が残っていることが多い。体には血管が太く浮き出ていて、呼吸は荒く、クビを上下左右にしたり、騎手の指示に反抗しようとしていたり。「どの辺に止まって挨拶するのだろう。いったいおとなしくしているものなんだろうか」

清水の仕事はカメラマンである。スポーツ報知で19年、決定的シーンを追いかけてきた。ジャイアンツ、サッカ―、オリンピック、そして競馬。「特にどれが専門というのではないんです。競馬は97、98年ごろ一番多く出かけたね」最近ではデスクという仕事柄、現場に出るのは月に1、2回と少なくなってきたが、天皇賞の日は、両陛下がお見えになる特別な日ということでレギュラーの若手の助っ人として加わっていた。スポーツ報知のカメラマンは、この日4人体制だった。

その様子を、清水は4コーナーを曲がりきったあたりに設けられている撮影台からカメラに収めた。馬券も嫌いではないし、仕事上も、どの馬が勝ちそうか、あらかじめ考えておく必要がある。清水は予想を立てた。混戦には違いない。こういうときは、なにかある馬が強い。「両陛下を迎えた武騎手が松永騎手の馬が馬券にからむのではないか」なんとなくそんな予感がした。しかし、考えた末、清水が指名した勝ち馬はスイーフトウショウだった。

そこに強引に割り込んできたのがヘヴンリーロマンスだった。藤沢和雄厩舎の2頭の間に、けんかの仲裁に入るように割り込んで、きれいに分け、最後は自分が先頭に出た。アタマ差の勝利である。馬たちがゴールを駆け抜けると、清水武は4コーナーの撮影台を降りて、メモリアルスタンドのほうに向かった。馬が戻ってくるまでにポジションを決めなければならなかった。で、駆け足になった。勝った馬がレースの

天皇賞(秋)のスタート。1枠1番のヘヴンリーロマンスは好スタートを決め、「自分のペース」でレースを進める



うなものだった。

翌日の新聞各紙には、両陛下に挨拶する松永の写真が掲載されていたが、清水のもの以上にこの日の静謐な空気を写し取ったものは見当たらなかった。

山本正司は、愛弟子の松永とヘヴンリーロマンスが挨拶する場面を見なかった。勝利が決まったら、地下の検査室に駆け下りて、馬が戻ってくるのを待っていたのだ。挨拶の場面は栗東に戻る途中、飛行機のテレビで見た。短い映像だったので、特に驚きはしなかったが、あとになると、驚かされるのが重かった。

「休みが明けてほかの調教師に会うとおまえのころの馬は、天皇陛下が来るのを知っていたんじゃないかっていわれた。そうでないや、あんなにおとなしくしているはずがないって。手紙ももらった。幹夫とヘヴンリーロマンスが挨拶する場面を見て感激しましたって、知らない人からずいぶん来たね」

思いがけない反響だったが、うれしいことではあった。ただでさえ大きな勝利に、より大きな花輪が付け加えられたよ



グレード制が導入されてから牝馬として2頭目となる天皇賞(秋)制覇の偉業を達成したヘヴンリーロマンス

だが、天覧の日の静謐を、あまり神秘的に考えるのは止めよう。

紀宮様のご結婚が間近という時期に、ヘヴンリーロマンスという名前の牝馬が栄光をつかむ。ヘヴンリーロマンスとは、天上の恋、貴人の慶事と読めないこともない。英語のご堪能な両陛下は、そうした暗合もお気付きになったのではないだろうか。

松永幹夫も、挨拶しているときの静けさはあまり気に留めなかった。おとなしくしてくれていたとはいえず、馬のことである。いつ、思いがけない動きをするかわからない。注意を払う必要があるのだ。周囲の空気をうかがう余裕はなかったのだ。

「それよりも、ぼくが一礼し終えたときのどよめきのほうが印象深かったですね。きつと、皆さん、あんまり見かけたことのないものを見た驚きがあったんじゃないでしょう」

勝利騎手の仕事も申し分なくやり終えて、この日の松永はパーフェクトだった。栗東に戻ると、若い厩務員から感激した調子で話しかけられた。

「あの写真を見て、自分の仕事に誇りを持てましたっていうんです」

うれしいことではあったが、どこか寂然としない部分もあった。レース後の挨拶を、きちんとやりお世話したのは、ヘヴンリーロマンスと自分にとって名誉ではある。だが、それは到底レースを勝った名誉に及ぶものではない。

「馬が勝ったことももつともつとほめて欲しかったですね」

牝馬の勝利は1997年のエアグルー

ヴ以来8年ぶりのことである。84年にグレード制が導入されてから牝馬が天皇賞・秋を勝ったのはエアグルーヴとヘヴンリーロマンスだけ。なんといつても歴史的快挙なのだ。それをなした馬に、もつと高い評価を与えて欲しい。

いかにも松永らしい心配りである。松永の中央GI勝利は、イソノループルのオークス、キョウエイマーチの桜花賞など過去5度あったが、すべて牝馬限定のレースだった。今度はじめて牡牝混合GIを制したが、それもまた牝馬によるものだった。柔らかな当たりと、牝馬に好かれそうなつゝ外見、物腰がそうした勝利を呼ぶのかもしれない。

もうひとつ、書き添えておかなければならないことがある。それは、松永が所属厩舎の馬で勝ったのはじめての中央GIだということである。

騎手のフリー化が進む中で、松永は一貫して山本厩舎に所属し、自厩舎の主戦ジョッキーとして活躍してきた。大げさな師弟愛などといったものではないだろうが、やはり特別な感慨はあったろう。

それは師の山本も同様である。「ウチがはじめてGIを勝ったハッピープログレスの安田記念のときは、幹夫がまだ赤帽(騎手候補生)だったよ。それがウチの馬で天皇賞だからなあ」

山本は騎手として、キーストンでダービーを勝っている。決して華々しい騎手生活ではなかったが、山本の名はキーストンとともにいまも語り継がれている。

調教師としても、毎年GI戦線をにぎわすような華々しい活躍は多くなかったが、07年春に定年を迎えるという最晩年にいたって、愛弟子と牝馬が大きな花東を贈ってくれた。



メモリアルスタンド前で馬を止め、両陛下に向かって馬上から一礼をする松永幹夫騎手

「表彰式の時は、少しウルウルツとなつたよ。オレの競馬人生は幸せだったからね」

自分の慶事が天皇家の慶事と重なった。その喜びはやはり特別なものがあつたろう。

それにしても、あの挨拶の瞬間、なぜヘヴンリーロマンスは静かに立ち止まっていたのだらう。まさか、天覧を知っていたなどということではあるまい。今から思えば、静かに立ち止まっていたのは、それほど長い時間でもなかった気がする。しかし、いずれにしても、あの忘れがたい静謐は、馬と騎手と一枚の写真によって長くファンの記憶に留まりつづけることだらう。

(文中敬称略)

あへ・たまき
1957年、北湖生まれ。スポーツライター。出版活動を経て、フリーライターとなる。『優勝』のほか、「スポーツグラフィック ナンバー」などでスポーツドキュメントを発表している。著書に『有馬記念物語』(青春出版)など。



これが報知新聞社のカメラマン・清水武氏が収めた「一枚の写真」。時間が静止したような「沈黙」が聞こえてくる

©報知新聞社